物心の關係に就いて

上田大助

一

廣く物心の關係と言はゞ、物心の本性並にその相互の關係を明かにせんとする本體論的考察の外に、更に對象(眞善美の諸對象)の成立構成に關して物(廣き意味の物卽ち對象或は其の素材たる質料等)と心とは如何なる關係を成すものであるかまた對象の認識に關して「心と物とは一致」するものなりや否や等の認識論的並に科學的の諸考察、[1]或は死後(身體滅後)は如何等の信仰形而上學上の諸考察[2]等々を總て、從つて殆ど哲學問題の總てを含むべきこととなるであらうと思はれるのであるが、從來最も普通に物心の關係として論ぜらるゝ所のものは、主として其の相互關係である。而してそれも多くは身心の相互關係である。而して其は言ふ迄も無く「物心平行」「物心相制」の問題として知られて居るのである。今本論文の考察せんとする所も、亦この物心の相互關係の問題に外ならぬのであるが、此處には之れを特に「身心」間 Psycho-physiological relation に限ることなく廣く物(物質)と心との關係 Psycho-physical relation として考察せんと欲するのである。と言ふのは此處では特に局部的に或は科學上の一問題として、身心間或は腦心間の特殊的關係を問題とするのでは無く、主として一般物心の「平行」及「相制」の可能不可能を問題とし度く思ふからである。而して茲にこの物心相互の關係としては從來平行說と相制說とが相對立して、互に他を排斥すべきものとなし、且つそれも多くは(經驗的事實としてゞはなく)形而上學上の假設として認めらるゝに過ぎないのであることは此處に特に言ふ迄も無いことであらう(之れに對

して今日「經驗的平行論」等の試みを見つゝあることも亦周知の事であらうと思ふ)。而して此等の諸說の多くは何れも從來の哲學的立場なる唯物論、唯心論、二元論、不可知的一元論、感覺的一元論(マッハ)等の何れかからなされて居ることも亦知られてゐる所である。今本論は之れに對して、筆者の以て唯一正當なる哲學的立場とする直接經驗說、卽ち「先驗的原理をも內に含む直接經驗說」、從つて「吾人に直接確實なる經驗に立脚し認識論に於て構成主義を取る立場」[3](其處には經驗卽實在は質料と形式と意識との三要素から成立すとせられる)から此問題を考察して見度いと思ふのである。蓋しこの直接經驗の立場よりすれば、此問題の眞に確實正鵠なる解決(卽ち何等の假說に依らざる眞の解決)が得られるではないかと考へられるからである。而して今本論文の考察せる範圍に於ても、左記の諸重要事が充分確實に結論し得らるゝではないかと考へられるのである。卽ち(一)平行說と相制說とは、互に他を排斥すべきものではなくて兩立すべきものであること、(二)その平行相制は之れを直接經驗する限り共に事實として(經驗的現象的事實たるのみに止まらず又實に本體論的事實として)認むべきものであること、(三)之れを假說とする場合には共に「形而上學的假設」とすべきものではなくして學術上の新發見的原理 „heuristisches Prinzip" 或は作業假定 Working hypothesis とすべきものであること等のことが充分明かにせられるではないかと思ふのである。卽ちこれを史的に見れば、太古以來の相制觀は其儘事實として合理的に基礎付けられ、更に平行說が新しく(但し從來の諸平行說とは異る意味に於て)樹立せられ得るではないかと考へられるのである。以下(一)「物」とは何ぞ、(二)「心」とは何ぞ、(三)「平行」とは何ぞ、(四)「相制」(卽ち精神物理的—物理精神的因果)とは何ぞやの順序に從つて考察を進め度いと思ふ。

① 本論の立場よりすれば對象の構成に關する考察は之れを本體論的考察或は形而上學的考察と稱するがより適當ではないかと思はれるのであるが(「哲學雜誌」第五百六十九號參照)、此處には暫らくカント派に從つて之れを認識論的考察と呼ぶこととした。又科學的考察と言ふのは例へば知覺の構成機構等は今日主として科學によつて攻究

せられてゐるからである。

② 信仰形而上學なる名稱に就いては「哲學雜誌」第五百六十九號掲稿參照。

③ 「哲學研究」第二百二十七號及「哲學雜誌」第五百六十九號

二

先づ「物」とは何ぞ。廣く物と言はゞ對象或は實在の一切を意味すべきこととなるのであるが、普通に物心關係の問題として考察せられる所の「物」とは專ら Matter 卽ち物質、或は物質的對象の謂であることは特に言ふ迄もないことであらう。然らばこの「物」卽ち物質的對象とは(本論の如き直接經驗說の立場から見て)如何なるものであるかと言ふに、直接的、本體論的には(直接經驗說に於ては直接的と本體論的とは同義語である、前記「哲學雜誌」參照)「知覺」が卽ちそれであつて、電子量子等物理學上の所謂「實體」ではないことは言ふ迄もないことであらう。此等のものは唯數學的思惟、科學的思惟の構成的所產であつて、直接なるものでは無く間接なるものである。本體論的物ではなく現象的(派生的)物である。(此等のものは何れも「知覺」の基礎の上に二次的に構成されたる或者である。科學的には計量的なる物理學的物から知覺が誘發せらるともせられるのであるが、哲學的には性質的なる知覺から、物理學的物が誘導せらるるのである。此事を明かにするものは卽ち今日の先驗哲學其他による科學批判である。)卽ち直接經驗說に於ける「物」(本體論的物)とは科學或は科學的實在論の考ふる如き物では無くして、素朴實在論の考ふる如き物でなければならぬのである(卽ち色聲香味觸等の諸感覺的性質が其儘「物」として考へられるのである)。元より從來の經驗說に於てもほゞ此事が認められてゐるとは思はるゝのであるけれども、唯從來の經驗說は本論の如くこの「知覺」に於て直に絕對的なる本體論的意義を認むることをせず(マッハを除く)、多くは他に其の原因根據を求めんとした所に不備が存すと思はれるのである。卽ち例へばバークレーに於ては之れを神に求め、カントに於ては之れを「物自體」に求め、ラッセル[①]に於ては物理學的物に之れを求めてゐるのである。特に物心關係の問題として物を知覺と見んとするものに、今日ベルグソンの如

き人があるけれども、②氏に於ても亦同樣に知覺の外に所謂實在界なる物的外界が獨斷（と言ひ得ると思ふ）せられて居り、知覺は反つて其の主觀的なる一變容とせられてゐるのである。③（マッハの經驗說に就いては後述參照）。また從來の觀念論的なる經驗說（例へばバークレー）に於てはこの「知覺」を以て常に必ず知覺として知覺（意識）されて居るものなるかの如く考へ、更に之れによつて之れを心の事として唯心論的（唯精神的）に考へんとする所（從つて常に之れを「觀念」と稱する）にも誤謬が存すと考へられる。（バークレーに於ては知覺が常に觀念と呼ばるゝのみでなくそれが實際「心の內に存す」④とせられ、「心以外如何なるものも存在せず」⑤とせらるゝ事は周く人の知る所である。然るにまた他方その知覺が心の外に存すともせられるのである。⑥此處にバークレーに於ける矛盾がある。）知覺卽ち物は必しも常に知覺として知覺意識され居るものでは無く、時にたゞ「物」として極めて素朴的に（外界の物として）經驗せられ得るのである。（古代素朴の意識は多く物をかく知覺の意識なく經驗したのである。）故に知覺には知覺＝物と知覺＝心との二面が存在するのであつて、その「物」の一面が知覺＝心の心作用とは區別して考へられなければならぬのである。卽ち其處には單に觀念（＝心）とのみは稱し得られざる或者が存在しなければならぬのである。⑥（バークレーに於ても、知覺を心以外とせる所あることは上に述べた如くである。）かく吾人は「知覺」に於ては一方「物」としての一面を有すると共に、他方心の方面をも有するのであつて（特に之れを明確に意識すると否とに不拘）、素朴的意識は唯その「物」の一面をのみ主として經驗するに反して、批判的意識、觀念論的意識、心理學的意識等はその心の方面をも明瞭に經驗するのであると考ふるのである。卽ち知覺は「物」として心の外に分離して存在するのでもなく又「觀念」として心の內に埋沒して存在するのでもなく、「物」としての獨自性を維持しつゝ常に心に卽し心と結合して存在すと考へられるのである。今若し知覺＝物がかく常に心に卽し、心と結合するの故に之れを猶觀念論の名を以て呼ばんとする人があるならば、そは元より其の人の自由であるが、然し之れを實際に於てバークレー流の觀念論と混同する

ことは絶對に許されないのである。而してまた知覺には常にかく「物」と「心」との二方面(二元)があるのであるから、之れをマッハの如く「感覺」(それが「物」を意味するのであれ、或は「心」を意味するのであれ、或は或る第三者を意味するのであれ)の一元となすことも充分適當とは言ひ難いであらうと思ふ。感覺=心の心作用以外他の心作用心狀態の之れと結合する場合に於ては一層然りである。(茲に吾人は知覺の構成機構に就いて詳述する必要はないことと思ふ。知覺の機構は古代に於て考へられた如く簡單なるものでは無く、甚だ複雜を極むるものであることは今日充分明かにせられてゐる所である。卽ち哲學的本體論的には、それが常に質料的感覺的要素と形式的意味的要素と意識的要素との三基本要素から成立するものであることが明かにされ、又科學的には生理學心理學等によつてそれが單に「外界事物の相」として獨立に存在するものでは無く、之れを知識認識する者の身體並に意識の構造及狀態がまた之れと一如に極めて緊密に關係結合するものであることが明かにせられてゐるのである。マッハの「感覺の分析」の如きも多くはこの機構を明かにせんとするものであると思ふ。然し知覺の機構構成はかく複雜を極むるものであつても、それが「客觀的者」として「外界のもの」として客觀的にそれとして認識され得ることは昔も今も何等異る所はないのである。卽ち素朴實在觀は此等の事に關係なく依然として成立し得るのである。而してかく構成の複雜にも不拘客觀的にそれとして極めて素朴的に認識され得ることは、一般他の如何なる對象に就いても全く同樣なのである。猶素朴實在論の可能の理論及その觀念論に對する關係等に就いては「哲學雜誌」第五八二號參照。また此處に吾人が物心關係に於ける「物」として感覺を取り感覺を取らざる理由は甚だ明かであらうと思ふ。と言ふのは本論に於てはその直接經驗說の立場から物心の關係を直接に、本體論的に、またその直接的關係を經驗的に考察せんとするのであるが、吾人の經驗に於て直接に與へらるゝものは常に具體的なる知覺であつて感覺ではないからである。感覺は唯その抽象分析としてのみ或はその極限概念としてのみ知らるゝに過ぎないものである。故に物心の關係を直接、經驗によつて考察せんと

する場合には、一般に先づ知覺が「物」として取られなければならぬのである。然しまた知覺は常に感覺を含み、又感覺は必ず知覺の内にのみ見出さるゝのであるから物心關係の「物」として知覺を取ることの代りに感覺を取るとしても、實際上殆ど何等の支障を生ずることはないのである。殊に知覺に於てその物質性の核心を成すものは感覺に外ならないのであるから、特に嚴密に純物質性を區別考察する必要のある場合には必ず分析によつて感覺が取られなければならぬのである。而して此處に言ふ迄も無くその知覺に於ける純物質性なる感覺と、諸他の心作用心狀態との結合關係がまたそれとして一つの物心問題を成すのである。)

以上述ぶるが如く吾人に直接經驗せらるゝ物、從つて本體論的なる物(かく直接經驗的と本體論的とを同義とすることが本論の如き直接經驗說の立場である)とは知覺に外ならぬのであるが、然らばその「物」は言ふ迄も無く性質的でなければならぬ。而して之れと共に直接經驗せられる時間、空間、運動等物界に關する一切の事がまた同じく性質的であることも特に言ふ迄も無いことであらう。(ベルグソンが「意識の直接與件」に於て感覺知覺の非計量性純性質性を力說せることは周く人の知る所である。また特に直接なる性質的時空と間接構成の計量的物理學的時空との關係に就いては「哲學研究」第二百十三號及第二百二十七號拙稿參照。)從つて其處には未だ計量的關係と言ふものが無く、所謂「實體」もなければまたエネルギー、エネルギー不滅則等の如きものも全く存在しないのである。「實體」、エネルギー、エネルギー不滅則等は唯計量的物理學の概念構成に過ぎざるものであつて、計量なき純性質的物界に於ては何等の意義をも有しないのである。而してその純性質的なる物界は吾人の不斷に經驗しつゝあるがまゝの不斷の生滅變化、不斷の「生住異滅」、不斷の創造、不斷の壞滅であつて、何等物理學の考ふる如き恒常一定ではないのである。(常に不定に變化しつゝあり、增減しつゝあり、時に殆ど無に歸することあるも常に經驗せられる所である。)然らばかゝる純性質的なる「物」の世界と計量的物理學の世界との關係は如何なるものであるかと言ふに、そは前きにも述べたる如く純性質的なる「物」

の基礎の上に科學的思惟が所謂數學化、計量化の方法によつて計量的物理學の世界を建設（「構成」）するのである。而してその建設（「構成」）には言ふ迄もなく始め先づ人爲的な規約を必要とするのであるが⑦、然しその規約は必ず或る一定の標準に從ふのであり、またその規約が既に一定に定められた以上、その科學の建設は決して恣意を許さないのであつて、學的思惟の必然に從つて必然的に遂行せられるのである。卽ち純性質的なる物界と計量的物理學の世界とは學的思惟によつて、必然的に一義的に結合せられるのである。（所謂「感官の證明」なるものは此間の關係を最も良く證明するものであらうと思ふ。）從つて計量的物理學の述ぶる所はそれの（その叙述の）對應する限りの性質的物相互間の關係を表示するものとも言ふことが出來るのである。卽ち計量的物理學は他面性質的意義をも有するのである。（計量的物理學を以て單に事物の計量的關係をのみ示すものとするのは未だ甚だ不充分であつて、また同時に性質的物界に對する關係、性質的物々相互間の關係調和が物理學の他の重要なる一面として重視されなければならぬと考へられるのである。ポアンカレーの如き人が特に感覺の關係と言ふことを强調力說するのは⑧一つの卓見であらうと思ふ。計量的物理學に於て感覺は決して排除すべきものでは無く、大いに重視すべきものでなければならぬと思はれるのである。）然しこれと同時に注意すべきことは、計量的物理學には常に其の依つて立つ性質的物界を一定（固定不動と言ふには非ず）とする要請が存することである。卽ち計量的物理學は一定の性質的物界を「所與」として唯その與へられたる範圍に於て、その一定なる體系內に於てその前件と後件との關係を數量的に規定言表せんとするのである。今若しその前件と後件とに於ける性質的物が明確一定に規定せらるゝ事がないとするならば、その間の必然的關係と言ひ幽數的關係と言ひ法則と言ふことが全く不成立となることは甚だ明かなことである。從つてまた物理學にはその前件及後件なるものが他の物的影響から隔離さるゝ事（他物の影響無しと絕對的にか或は蓋然的にか假定し得ること）が必要なのである。卽ち所謂「體系の孤立化」が條件として必要なのである。若しこの「體系の孤立化」と言ふことがなけれ

ば法則函數關係等が全く不可能となる。唯に關係が複雜となつて法則函數關係が求め難いと言ふ計りでなく、體系(性質的所與)が不定であり無規定であると言ふ事によつてそれは全く不可能なのである。卽ち其處には物理學が成立し得ないのである。夫故に物理學の實際の對象は全性質的物界(それは常に不定である)ではなく、必ずその一部分一斷片とならざるを得ないのである。卽ち性質的所與の比較的簡單なるもの、比較的恒常的なるものでその前件後件が一定明確に規定せられ得る場合に限られるのである(卽ち或は太陽系のみを取るとか或は電氣回路のみを取るとか或は光電現象のみを取る等である)。全性質的物界は常に不定に生滅變化しつゝあるのであるから、物理學の理念要請とは全く相容れないのである。性質的所與の複雜なる場合(それの極限は全性質的物界が比較的不變化に止まる場合或は一瞬時の切斷であるが)は若しその所與が一定と考へられ得る場合には物理學の理念は可能であるけれども、其處に實際に計量的關係が定められて物理學が實現されて行く爲めには、その性質的所與を逐次一定明確に規定して行くことが必要である。(然らざれば函數關係法則等が成立するを得ない。故に此場合始めに想定したる所與の一定は單なる假定、作業假定たるに止まるのである。)故に物理學に於てはその實際に經驗的實驗的に實行する所の事又實行し得る所の事と、單に理念として考へらるゝに止まる所の事とを區別することが必要であり、又之れによつてその學の可能なる範圍(限界)とその成果の適用され得る範圍(意義)とを充分明かに自識することが甚だ必要であると思はれるのである。(性質的物界の全體とか或はその不定或は無規定なる部分範圍は今日の物理學の及ばざる所と言ふに止まらず、實に物理學の理念其者の及ばざる所なのである。物理學の範圍以上、より高き次元に屬するのである。エネルギー不滅則の如きも直接には唯個々の「孤立せる體系」に就いて適用せらるべきことであつて、之れを全物界の事として考へんとするには、更に他の考慮を必要とするのである。卽ち全物界を恒常不變とし之れをも一つの一定所與たる「孤立せる體系」と見做す場合にのみエネルギー不滅則は全物界を支配するものとして考へ得られるので

ある。然らざる限りエネルギー不滅則は何等意義を有しないのである。性質的物界の全體は勿論、その或る一小部分と雖も孤立でも無く又一定でもない不定變化の場合には、エネルギー不滅則は全く適用し得られないのである。反つて性質的物界の消長變化と共にエネルギーも增減變化すとも考へられ得るのである。變化にても二種があつて物理學的變化とも稱すべき、物理學の取扱ひ得る一定の變化と物理學の取扱ひ得ざる全く不定なる變化とを區別することが必要である。）かく計量的物理學はたゞ一定の規約一定の條件一定の理念の下に於てのみ成立し得るのであり、從つて現實の千變萬化不定の性質的物界に對しては、唯部分的にのみ可能なのであり、またその成果たる計量的關係なるものは思惟の間接なる構成であつて、直接端的に經驗さるゝものではないのである。此二つの意味に於て性質的物界と計量的物理學の世界とは次元を異にすと言ふことが出來る。計量的物理學は言はゞ立體的に流動變化しつゝある性質的物界の或る一部を固定凝化して（所謂「孤立化」なるもの）、その上に固定不動の計量的建築物を築造するものとも言ふ可きものである。而してその築造物は直接流動の實世界（real）に對しては一つの可想物（數學の所謂"imaginary"）を成すのである。（物理學の時間が直接實在の時間たる「眞の時間」real time に對して之れを遙かに遠ざかる抽象的時間"imaginary" time であることは既に述べた所である、「哲學研究」第二百十三號。）またその築造物は實際には廣狹大小區々であるけれども（或は天體の世界、或は原子構造の世界等々）、理念によつて不變恒常なる一物理學的世界內のものとして思惟せられるのである。故に全物理學的世界なるものは間接を二重に重ねて思惟せられたものであつて、現實の全性質的物界とは甚だ遠く隔たつたものである。性質的物界の所々に部分的に構成さるゝ個々の築造物（卽ち個々の微分方程式及其の解法）は夫々其の依つて立つ性質的所與と必然的關係にあり、從つて之れと對應するのであるけれども、其等個々の建築物の屬すと考へらるゝ全物理學的世界なるものは唯理念として抽象的に考へられたものに過ぎないのであるから、何等性質的所與と密接なる關係に立つものではないのである。全性質的所與に對應す

るものでもなければ、また全性質的物界と同一なるものでは猶更ない。前者は恒常不變であるが後者は千變萬化である。而してその「恒常不變」は唯思惟によつて考へられたものに過ぎないのである。（全物理學的世界を一つの築造物として直觀すなど言ふことは絶對にあり得ない事なのである。）全物理學的世界なるものはかく性質的物界の全體と直接何等關係なきものであるが、そはまた個々の物理學的成果とも何等實質的具體的な關係に立つものではないのであつて、唯抽象的に其等の結合統一として思惟せらるゝに過ぎないのである。）人若し理念と現實との別を明かにせずして全物理學的世界を恒常不變とすることから直に現實の性質的物界をも同じく恒常不變一定とするが如きことがあるならば、そは甚しく事實の認識を誤るものと言はなければならぬ。（若し物理學によつて個々の性質的所與に對して必ず夫々物理學的實體の「相當量」Equivalent を對應せしむることとするならば、現實的には恒常不變では無く寧ろ反對に物理學的實體の全量が全性質的物界の增減變化と共に常に增減變化すと樣に考へなければならぬものであらう。此意味に於て心或は經驗が「エネルギーを創る」と言ふことも充分言ひ得られることではないかと思ふのである。）又若し物理學の目的が計量的關係を以て性質的物の關係を理解することにあると言ふことから、性質的物界の全體は物理學的世界の全體或は其一部から說明理解すべきものである等と考へる人があるならば、そは全く本末を顚倒するものであると言はなければならぬ。何んとなれば個々の物理學的成果は夫々性質的物界の或る一部分から導き出さるゝのであり、また全物理學的世界なるものは其等個々の物理學的成果から遙かに超躍してその統一的一體として（言はゞ架空に）想定せらるゝものであるからである。而してその性質的物界の內には如何にしても物理學によつて取扱ふことの出來ない剩餘の存することは既に屢々述ぶる所の如くである。（故に物理學の全成果の內包は常に全性質的物界より小さなのである。）從つて全物理學的世界或はその一部から、或は（より適切には）物理學の全成果から性質的物界の全體を說明すると言ふが如きことは如何なる意味に於て

も望み得られないのである。（計量的物理學の成果の有效なる範圍は唯既にそれとの必然的關係が經驗によつ確かめられて居る性質的物の部分に限らるゝのである。それ以外に出づることは一歩も許されないのである。）吾人は前きに個々の物理學的成果を其の依つて立つ性質的所與の現實 real に對して "imaginary" と呼んだのであるが（それが間接なる構成であるの故に）、全物理學的世界なるものは之れと意味を異にして更に一層 imaginary である。個々の物理學的成果は間接なる構成であるとは言へ猶直接經驗の現實と密接なる關係にあるのであるが、全物理學的世界なるものは唯單なる理念に過ぎずして、直接なる實在とは殆ど何等の關係を有しないのである。（直接の實在たる全性質的物界は物理學に取りては唯所與として默受するの外はないのである。物理學の課題はたゞ此與へられたる所與の基礎の上に、その方法上可能なる範圍に於て徐々に計量的關係を構成し行くことにあるのであつて、性質的物界の由來原因を問ふが如きことは全く物理學の範圍を超ゆることなのである。）

性質的物と計量的物、性質的物界と計量的物理學の世界との區別はほゞ右の如くであるが（前者は本體論的物、後者は派生的物、前者は直接、後者は間接）、然らば今物心關係の考察に於て「物」としてその何れが取らるべきであるかと言ふに、吾人はそは必ず前者卽ち直接なる性質的物（卽ち知覺）でなければならぬと考ふるのである。と言ふのは此處に本論の考察せんとする所は（一）物心の本體論的關係であり、（二）又その直接的關係であるからである。而して從來の物心論に於て考察さるゝ所も亦之れに外ならぬと考へられるからである。心は常に吾人に直接であるが、これと直接なる關係にある物とは卽ち知覺に外ならぬのである。而してそはまた同時に本體論的物である（その直接の故に）。（從來の物心論は何れも物を以上の如く區別することなく、殆ど無批判的に或は性質的物を取り或は計量的物理學的物を取る。古代及中世物理學の未だ發達せざる時代に於て、性質的物が取らるゝことは元より當然の事と思はれるのであるが、近代物理學の發達せる後に於ても、心理學等に於て物心の關係が直接に觀察さるゝ場合には、多くは性質的物が取

られてゐるのではないかと思はれるのである。例へばジェームスが「自動機械說」を否定しつゝ物心の對應を說き、[9] ティチェナー等が生理的隨伴現象として示す所のものゝ如きは[10]卽ち之れでないかと思ふ。蓋し心理學は本來「直接なる經驗の學」として心と共に物にもまた自ら直接なる性質的物が取らるゝ事となるのは極めて自然のことではないかと思はれるのである。たゞ從來の心理學が之れを特に計量的物理學的物と異るものとして區別せざる所に無批判が存すと考へられるのである。反之デカルト、スピノザ以降物理學の發達せる以後の哲學的物心論は殆ど獨斷的に物理學的物を取る。而して性質的物には殆ど注意しないのである。)(猶物をかく性質的物と計量的物理學的物とに分かつことは物心の問題以外にも甚だ必要であると思はれるのであつて、例へば生物學、生理學等に於て生物體の物的狀態或は變化を考ふる場合等は主として性質的物が取らるべきものではないかと考へられるのである。殊に之れを全體として考察する場合には一層左樣でなければならぬと考へられるのである。と言ふのは此等の學は物理學とは異り、より直接なる學であり、且つ必しも計量的關係を目的とするものではないからである。勿論此等の學に於ても何等かの近似或は蓋然度に於て計量的物理學によつて取扱はるべき多くの部分を有することは否定することの出來ないことである。然し此等の學はより直接なる學として本質的には物として性質的物が取らるべきものではないかと考へられるのである。生物學生理學の目的は生物體の各部分々々に就いて之れを「孤立せる體系」として他部より隔離してその物理學的現象をそれとして研究することにあるのでは無くして、「有機體」として常に全體との關係に於て考察せらるべきものであるから、其處には常に性質的物が主たる關心をなすべきものであることは甚だ明かなことではないかと思ふ。吾人は今日の生物學に於て形態學、生態學、分類學、發生學、進化學等々性質的物を取扱へる部分の極めて多くを有するのであるが、此等の性質的部分は恐らく永久に此等の學の本質或は中心部として殘るべきものであらうと考へられるのである。ハンス・ドリーシュはその「有機體の哲學」に於て "It is *form* particularly which can be said to

occupy the very centre of biological interest; at least it furnishes the foundation of all biology" と言ふて⑪ゐるのであるがその「フォーム」とは卽ち性質的物に外ならぬのである。⑫地質學の如きも之れと相似たるものであつて性質的物が此學の主要部を占むべきものであらうと思はれる。計量的關係を以て生命とする物理學に於ても實にその基礎となり出發點となるものは性質的物であり又その計量的關係の最後の檢證者判定者となるものはこの性質的物に外ならぬのである。)

猶此處に吾人は後の必要のために直接なる「物」の全體卽ち性質的物界の全體は一つの連續的一者を成すものであることを特記して置き度いと思ふ。(「自然の一體」と言ふことがあるけれども物理學的世界の一體は既述の如く單なる理念或は要請たるに止まるのであるが、性質的物界の一體は直接の經驗であり、直觀的事實である。又物理學上の物は必しも連續ではないのであるが、⑬直接なる知覺=物の世界は吾人の現に見るがまゝの眞の連續的一者をなすのである。)

① B. Russell, Problems of philosophy, Chapt. III.
② Bergson, Matière et Mémoire.
③ Bergson, op. cit., (English translation) pp. 22—30. &c.
④ Berkeley, Principles of human knowledge, Part I, II.
⑤ op. cit., Part I, VII.
⑥ op. cit., Part I, II & XXIX.
⑦ ポアンカレー「科學と臆說」、「科學の價値」等參照。
⑧ ポアンカレー「科學の價値」第十一章第六節。
⑨ W. James, Principles of psychology.
⑩ Titchner, A primer of psychology.
⑪ Hans Driesch, The science and philosophy of the organism, 1929, p. 7.
⑫ J. Reinke, Das dynamische Weltbild, S. 77.
⑬ 原子物理學量子論等の不連續觀。

三

次に心とは如何なるものであるかと言ふに(直接經驗說の立場から見て)、そは言ふ迄もなく今日の心理學の示す所のものが卽ちそれである。と言ふのは今日の心理學は直接經驗の學として心を研究するものであるから

である。唯從來の心理學は多くは之れを唯人性論的意義にのみ解するに過ぎないのであるが、吾人は之れをまた同時に本體論的意義及び宇宙論的意義に解するのである。殊に自己の心を以て(直接には)唯一の心、從つてまた(直接には)心の全體となすのである。(直接には自己の心が唯一絶對であつて他人の心、他の心は總て唯間接に考へられたものに過ぎないのである。「哲學研究」第二百二十七號及「哲學雜誌」第五百六十九號參照。)而して今此處に物心の問題として特に注意せらるべきことは(一)心の全體は常に一つの連續的一者(所謂統一 Einheit)を成すこと、(二)心は(固定不動の實體ではなくして)不斷に流動變化しつゝあること、(三)眞の「物」或は眞の物質性である知覺或は感覺には常に必ず知覺=心或は感覺=心の心作用、心狀態が卽してゐるものであること、(四)從つて心の範圍は「物」(=知覺)の範圍より遙かに大であること(假りに後者を以て二次元の表面とすれば前者は三次元の立體である。次節第一圖參照)、(五)また物心の關係の考察には(哲學的に)心の全體が一全體として考察せられる場合と、部分的に個々の心狀態、心作用が(科學的に)考察せられる場合とがある等のことが主なるものであらうと思ふ。

四

次に「平行」の問題であるが、此事に關して先づ第一に注意すべきことはその「平行」の意義である。これには從來對應 Entsprechen, correspondence or concomitance と平行 Parallelgehen との二つの意味があることは周知の事である。而して通常此二者は常に殆ど相伴ふのであり、從つて從來動もすれば之れを充分嚴密に區別して考察すると言ふことが無いのであるが(例へば現代の著者にては W. McDougall, Body and mind; C. A. Strong, Why the mind has a body; Georg Sommer, Leib und Seele; &c. ヴントの如きも亦左樣であると考へられる)、吾人は此二者は概念上は嚴に區別せらるべき二つの事でなければならぬと思ふのである。何となれば前者は必しも時間の進行を問題とせず、物(一々の物)と心(一々の心作用心狀態)との對應の關係を見んとするものであり(從つて時間を豫想する場合に於ても常

に瞬間が考へられて居り、時間の進行と言ふことは必しも問題とせられないのである)、また後者の場合は時間的進行と言ふことが主たる關心を成すのであつて、對應は必しも問題ではなく又必しも必要でないからである。概念上は一々嚴密なる對應をなすことなくして平行することも考へ得られるのである。故に一々の對應關係を明かにせずとも平行 Parallelgehen は證明し得られることがあり、又反對に平行は證明し得ても對應は未だ證明せられざる場合があり得るのである。(反對に若し對應が完全に證明せらるゝならば、平行は之れによつて自ら證明せらるゝ事となるのは甚だ明かなことである。)而してまた特に此狹義の平行が問題とせらるゝ場合には、特にその時間の性質が注意せられなければならぬことは明かなことである。卽ち心の時間と物の時間とは果して同一であるか否か、或は相等しき速さを以て流れつゝあるか否か等が考察されなければならぬのである。かく吾人は「平行」の問題には對應と平行との二つの意義を區別することが甚だ必要であると思ふのである。(今從來の平行說中に於てはスピノザ、マッハ等は主として對應の關係を問題とするものであり、マクドガル[1]、ゾンメル等[2]現代の物心論の多くは何れかと言はゞ近代の時間意識によつてより多く平行を問題とするものではないかと思はれる。)

右の如く從來の平行說に於て考察せらるゝ所は主として對應と平行との二であると思はれるのであるが、吾人は「平行」の問題には更に物心の接觸結合と言ふことが考察されなければならぬと考ふるのである。少くとも物心の關係問題としては此事が極めて重要な事でなければならぬと思はれるのである。今「平行」の問題に於ても吾人はこの接觸の概念を導入することによつて甚だ容易に之れを解き得ることとなるではないかと思ふのである。茲に言ふ迄も無く對應と接觸とは異る概念であつて例へばマクドガルに於ては接觸せざる相伴對應が考へられて居り[1]、又不可知的一元論に於ては接觸結合は不可知境に於て求められるのである。然らば今吾人の立場に於て物心の接觸關係は如何にあるかと言ふに、その關係は極めて容易に見出さるゝのであつて、前述の如く「物」=知覺は常に必ず知覺=心を(最小限度に於て)

伴ふのであるから、「物」の側よりすれば物界と心界とは完全に接觸す（全面的の接觸）と言ひ得るのである。卽ち物の側よりしては物心は完全なる對應合致を成すと言ふことが出來るのである。（茲に或は心理學乃至物理學の法則を借り來つて、微弱なる刺戟或は强大なる刺戟或は高周波低周波には知覺を生ぜずと言ふ事から、物心の完全なる對應合致を否定する人があるかとも思ふのであるが、此等の法則には多くの間接なるもの構成されたるものが含まれてゐるのであるから、それによつて現に直接に經驗さるゝ所の事を否定することは出來ないのである。間接なるものは總て直接なるものに基き之れから導き出さるゝのである。一次的者で無く二次的者派生的者である。然るに此處に吾人が「物」と稱するのは考へられたる物、或は學的思惟によつて構成された物等の間接的物ではなく、現在直接に體體せらるゝ知覺其者を言ふのである。　夫故かゝる直接なる「物」が知覺＝心を生ぜずなど言ふことは絶對にあり得ないのである。）而して此處に物界と心界とは夫々一つの連續體であり且つ共に（同一なる經驗の內容として）所謂「眞の時間」の速さを以て進行するのであるから、　それが必然平行parallelgehen すべきことは甚だ明かである。　かく吾人は物心の接觸結合と言ふ一つの事から、その對應と平行との二を同時に證明することが出來ると思ふのである。（之れによつて見れば物心は「互に接觸することなくして相平行する」[2]ものでもなく又「或る一點に於て交はる」[3]ものでもない。「物」の全面に於て接觸しつゝ平行するのである。吾人はかくの如き全面的なる合致對應は之れを「平行」と稱せずして一如と稱するが最も適當ではないかと思ふ。マッハはその所謂「感覺」に於ける物と心との結合一體を以て「同一」[4]と呼ぶのであるけれども、それは甚だ不適當ではないかと思はれる。何となればよしそれは感覺として常に一であつても其處には常に物の一面と心の一面とが區別せられ得るのであるからである。單純なる感覺に於ても既に左樣に考へられるのであるが、知覺其他の心作用の場合に於ては一層然りでなければならぬと思はれるのである。而してマッハに於ても他の個所に於ては「平行」が云爲せられてゐるのである。[5]）

右の如くこれを「物」の側から見る時は「平行」の問題は極めて容易に解決せられるのであるが、之れを心の側から見る時は如何になるであらうか。此場合に於ても平行 Parallelgehen と言ひ得らるゝ事は全く同樣であるが對應結合の關係は左樣に容易には結論し得られない。と言ふのは前きにも述べたる如く心の範圍は物の範圍より遙かに廣く知覺の外極めて多くの心作用心狀態を有するのであるから、從つて此等諸種の心作用心狀態が如何に「物」と對應結合するかゝ充分明かでないからである。從つて此場合には心の全範圍に渡つてその心作用心狀態が總て例外なく常に之れと對應する「物」(外界の此もの彼のもの、或は身體の此部分彼部分等)を有するものであるか否かゝ問題とせられるのである。而して此問題に答ふるためには「思辨」或は獨斷に依るべきではなく、經驗(從つて科學)に依るべきものであることは特に言ふ迄もないことであらう。今此問題に對して今日の心理學は元より未だ完全に答ふることは出來ないのであるけれども("Every psychosis is definitely correlated with a neurosis.,, など言ふことも元より唯單なる假定或は豫想たるに止まるのであつて、事實心の側にも未だ物との對應の明かならざるものがあり、又腦の側にも心との對應の明かならざるものゝあることは廣く知られてゐる所である)、吾人は(一)前きに述べたる如き最小限度に於ける「物の側からの完全なる對應合致」以上遙かに多くの心作用心狀態に就いて物心の對應合致が既に確認確證せられて居ること(身心の關係に於て又廣く眞善美の諸關係に於て)、(二)他人の心理の觀察理解は必ず物的與件によらなければならぬのであるが、吾人はその他人の心を完全に知り悉さんとする(知的並に道德的の)要求を有すること、(三)著しい知情意活動には必ず生理的隨伴現象が認めらるゝのであるから、微弱なる心的活動にも亦何等かの程度の生理的現象が隨伴するであらうと考へることは甚だ自然である(今日心理と諸電氣現象殊に電磁波現象との關係が求められつゝあることは周知の事であらうと思ふ。)等の理由から、また心の側からの完全なる對應合致があり得べきこと、否確からしきこと probable として充分承認せられ得るではないかと思ふのである。從つて之れを新發見的原理

„heuristisches Prinzip"[5] 或は作業假定とすることは極めて至當であると考へられるのである。（但し茲にヴント等の心理學者に於ては、此原理は唯科學上の一假定一原理たるに止まるのであるが、本論の如き立場に於ては之れが直に本體論的形而上學的意義のものとなるのである。また此處に物心の對應合致と言ふは極めて廣き意味に於て言ふのであつて、「物」を必しも身體或は腦神經等と限ることなく廣く物の全範圍を取つてその何れかと任意の心作用心狀態とが對應合致するや否やを見んとするのである。狹く特殊的に Psycho-physiological relation 或は更には Psycho-neural relation に局限すること無く廣く Psycho-physical relation を見んとするのである。故に例へば美的對象に美的感情が伴ふ如き場合は之れを物心の對應合致として數へるのである。而して局部的に身心或は腦心の關係は未だ明かにせられざるも外界對象との對應合致は甚だ明かである場合が甚だ多いのである。夫故に本論の所謂物心の完全なる對應合致の假定は心理學者の身心或は腦心の完全なる對應合致の假定よりは遙かに容易に承認さるゝのである。然しまた他方物々間の關係に於て外界の事物が總て直接身體の感覺機關及運動機關等と極めて緊密に關係付けられて居ること、身體の殆ど總てが神經系統と關係付けられて居ること、外界知覺は總て神經系統に關係付けられて居ること、等を考ふれば此等局部的なる物心の對應合致もほゞ同程度の假定とせられ得るであらうと思はれるのである。のみならずかく「物」の側に於て外界事物と身體と神經系統との三者が極めて緊密に關係結合せられてゐることが、また夫々物心間、身心間、腦心間の完全なる對應合致の確信を極めて鞏固ならしむるのである。然し茲に言ふ迄も無く總て此等の「完全なる對應合致」は唯信仰或は假定たるに止まるのであつて未だ完全に確かめられたる事實ではないのであるから、或る人々の如く之れを法則と稱することは許されないのである。[6]）かく之れを心の側から見る時は物心の完全なる對應合致は未だ事實として完全に樹立することを得ず、唯作業假定或は新發見的原理とするの外はないのである。

以上の考察によつて吾人の明かにし得た所は（一）物心は完全に平行す parallelgehen（二）物の側から見る時

は物心は完全に對應合致する、(三)心の側から見る時は物心は極めて多くの部分に於て對應合致するけれども、その完全なる對應合致は唯作業假定或は新發見的原理とするの外はないこと、但し之れをかゝる原理或は假定とする事には經驗上充分なる理由があること等である。而して物心の完全なる對應合致はかく唯假定たるに止まるのであるけれども既に「物」の側からの完全なる對應合致が確かめられて居り、又物界と心界との連續的一者たる事から物心の一體たることが結論し得られるのであるから、之れを假りに物心の一如と稱することは恐らく差支ないことであらうと思ふ。(吾人は從來「人法一如」或は「萬物相關」等の語を有するのであるが、此等の一如一體もたゞ此程度に止まるものと見なければならぬのである。然らば「身心一如」; Einheit von Leib und Seele" 等は更に之れ以下の事でなければならぬ。)

以上の如くして直接經驗說の立場に於ては平行說が經驗的にまた同時に本體論的に樹立し得られるのであるが、今之れによつて從來の諸平行說を概觀批判するに、先づその平行說の種類に就いては本體論の種別に從つて凡そ次の四種となるであらうと考へられる。卽ち(一)唯物論の立場から心的現象をエピフェノメナと考ふるもの(ハックスレー等)、(二)唯心論の立場から反對に物的現象を一種エピフェノメナ或は陰影の如きものと見んとするもの(バウルゼン、ストロング等)、(三)二元論の立場から物心の二者を全く沒交涉に相平行するものとするもの、(四)不可知的一元論の立場から物心の二者を不可知的なる一者の二方面とするもの(スピノザ、スペンサー等。カントも或は此部類に入れ得るものであらう)[7]之れである。(以上の外猶直接經驗に基かんとするマッハの感覺一元論による平行說があるのであるけれども之れに就いては既に幾分述ぶる所があつたので此處に省略することとする。)今此等の諸平行說(マッハを除く)を見るに先づその依つて立つ哲學的立場が何れも正鵠を得ないものであることは言ふ迄も無いことであるが(何れも所謂「古き形而上學」である)、その平行說に就いては何れも「物」を(直接性質的なる知覺とせずして)機械的物理學的のものとする獨斷が認められる(デカルト學派、スピノザ、ハックスレー等は元より

ストロング[8]の如き人も亦之れである)。而して吾人は從來の平行說の誤謬の根は實に此處に存するのであると思ふのである。卽ち物をかく間接なる機械的、計量的物理學的物とする結果は物と心とが(一)甚しく隔絕することとなり(と言ふのは此場合心は直接 real であり物は間接 imaginary である)、且つ(二)「異質的」のものとなつて(イ)その對應及結合に關して甚だ困難を感ずることとなるのである(或は全然沒交涉のものとするとか或は不可知者によつて結合する等のこととなるのである)。(スピノザの平行說の如きもその心と物とを一本體の兩面として紙の表裏の如きものと見ることによつて成立してゐるのであるが、然しかくの如き關係は物を直接なる知覺卽ち性質的物とするに非ざれば不可能なのであつて之れを物理學的物とする時、物心は必然甚しく隔絕しなければならないのである。)(ロ)また平行、Parallelgehen の事に關しては心の直接的なる「眞の時間」(real)と物の抽象的間接的なる物理學的時間[9](imaginary)との二者を混同することとなつて背理に陷るのである。(而してかく互に隔絕せる物心の二者を同所に於て關係付けんとすることから物心論が遠く形而上學の迷宮裡に導かるゝこととともなるのである。)而して此等の場合常に殆ど例外なく物の側が重視せられるのであつて、例へば物理的刺戟はあつても知覺を生ぜざることがあるとか或は物界は不斷連續するもの、心は中斷することがある等とせられるのである。[10](かくの如きは總て間接に依つて直接を捨つるものであつて、本末の顚倒たることは既に屢々述べた所である。)これによつてまた(心の中斷にも不拘猶平行說を維持せんがために)或は「無意識」を假定するとか(ミュンステルベルグ等)或は不可知なる物自體を假定(ストロング等)しなければならぬこととなるのである。或はまた物を機械的とすることによつてそれが甚しく心と「異質的」のものとなり、心を之れと平行とする時其處には必然目的、價値、意味、倫理、歷史等の諸文化現象の可能が疑はるゝことともなるのである。[11]かく從來の平行說は獨り物理學をのみ重視して他の心理學的事實、文化現象等を總て無視せんとするのである。然るに今吾人の立場に於ては物として間接構成の機械的物を取らずして直接なる知覺を取り、

物を主とせずして寧ろ直接なる經驗卽ち心を基として考へるのであるから、何等上記の如き困難背理に陷ることなく、二元と一元との關係の如きも良く可知的に解決せれらるのである。（卽ち物心は二元として對立區別せられ乍ら猶一如一體として一元的に考へ得られるのである。）かくの如く物を間接構成の機械的物理學的物とする限り平行說は如何なる意味に於ても成立し得ず、物を直接なる知覺とし性質的物とする時平行說は完全に成立し得るのである。（「物」をかく純性質的物とすることによつて事實上平行說を眞に確實に樹立し得た最初の人は恐らくマッハであらうと考へられるのであるが、たゞマッハに於ては總てを感覺の一元に還元せんとした所に未だ平行說としての不備が存するのではないかと思はれるのである。又今日の心理學の平行說の如きもその所謂物を直接なる性質的物とする時それは正當なのであるが、之れを物理學的機械的物と考ふる限りそれは正鵠ではないのである。而して吾人はその心理學の實際なしつゝある所を見るに、多くは性質的物が取られつゝあるのではないかと思はれること既に述べた所の如くである。心理學に於て測定する時間の如きも言はゞ性質的なる「眞の時間」の示標であつて物理學の方程式中に於て取扱はるゝ眞に抽象的なる物理學的時間とは甚だ意義を異にするのである。吾人は心理學は「直接經驗の學」として物にも間接なる計量的物理學的物を取らずして直接なる性質的物を取るべきものであると思ふのであるが、心理學は多くの場合既に久しく此事をなしつゝあるものではないかと考へられるのである。）

猶此處に從來の平行說の批判の一部として近代の身心關係論に就いて一言することが必要であると思ふ。と言ふのは近代の身心論は殆ど總て（と言ひ得ると思ふ）心と腦狀態との關係 Psycho-neural relation をのみ考察し、或は唯之れのみによつて物心の問題（平行相制の問題）を解決せんとするものゝ如く思はれるのであるが（デュ・ボア・レイモン、ベルグソン、マクドガル、ストロング、ウ・ジェームス等[12]）、然し腦狀態はその生ける實際の狀態を直接觀察することが至難或は殆ど不可能（詳細には全く不可能）であるから（と言ふのは直接には自己の腦狀態が觀察されなければならぬからである）腦

心の關係は多くは甚だ間接であり、且つ腦は物としては極めて一小部分であるから、之れを特に重視して一般物心問題の焦點或は最後の解決者とするが如きは甚だ當を得ないものではなからうかと考へられるのである。元より科學上の一特殊問題として之れが一つの重要なる問題を成すべきことは言ふ迄もないことであるが、哲學上之れを以て物心問題の唯一の或は最後の解決者なるかに考ふることは甚だ當を得ないものではないかと考へられるのである。（總て問題の確實なる解決には直接なる經驗の確證を必要とするのであり、且可及丈け廣い範圍に歸納することを要するのである。）殊に腦狀態として物理學的狀態（原子の運動等）を考ふるが如きは間接を二重に重ねるものであつて問題の解決からは餘りに遠く隔たるものと言はなければならぬ。そは唯徒に空しき思辨に導くのみである。（例へばストロングが感覺とその感覺的腦狀態 sensational brain-event との相關は繼起であるか同時であるかを問ひ、之れによつてその相關の相制であるか平行であるかゞ決定せられ得るかに考へるが[13]如きは甚だ意味なき思辨を弄するものと思はれるのである。「その時間關係が經驗によつて決せられ得ない」と言ふ計りで無く、抑之れを問ふことが無意味なのである。と言ふのはその所謂感覺的腦狀態なるものは元より不可知境のものであり、唯その感覺に對應する或は先行する狀態として單に思惟せらるゝものに過ぎないからである。從つて此場合その感覺的腦狀態なるものをその感覺に先行するものとして思惟或は定義することとすればその相關關係は相制となり、又若し之れを對應として思惟定義すればその關係は平行となる。即ち單なる思辨に過ぎないのである。またベルグソンが「若し活動最中の腦の內部を觀察し諸原子の來往の跡を辿り且つ其等のする所の總てを解釋し得る人がありとすれば、かゝる人は精神の內に生滅するものゝ幾分を疑ひも無く知るであらう。然しその極めて僅かしか知らないであらう。[14]」とか或は「同一の腦狀態に對して異つた心狀態の極めて多くが等しく適合する。[4]」等と言ふが如きも同じく無益なる思辨である。）（未完）

① W. McDougall, Body and Mind, Chapt. XI.

② Georg Sommer, Leib und Seele, S. 7.

⑬ ボカヌトゲヌカンハ物 (Bergson, Matter and Memory, English translat'on, p. xi ; p. xii)

⑭ E. Mach, Die Analyse der Empfindungen, 5teAufl., S. 36.

⑮ Wundt, Grundzüze der physiolog. Psychologie (Schlussbetrachtungen); E. Mach, Die Analyse der Empfindungen (5te Aufl. S. 50) ; &c.

⑯ Law of psychophysical correlation (C. A. Strong, Why the mind has a body, p. 38) ; Law of psycho-neural concomitance (W. McDougall, op. cit., 1915, p. 116) ; &c.

⑰ W. McDougall, op. cit., Chapt. XI 參照。

⑱ C. A. Strong, op. cit., p. 188 ; &c.

⑲ 「哲學研究」第二百十三號拙稿參照。

⑳ Münsterberg, Psychology, general and applied, 1925, p. 42 ; Windelband, Einleitung in die Philosophie ; &c.

㉑ Windelband, op. cit. ; &c.

㉒ Du Bois-Reymond, Ueber die Grenzen der Naturerkenntnis ; Bergson, Matière et mémoire, L'Énergie spirituelle ; W. McDougall, Body and mind ; C. A. Strong, op. cit. ; W. James, Principles of Psychology.

㉓ C. A. Strong, op. cit., pp. 62—66.

㉔ Bergson, Mind-energy (English translation), p. 42.